

【研修参加学生の報告書から】海外異文化体験実習（イスラームの多様性を学ぶ）

・都市による宗教色の違いを肌身に感じる事ができた。一口にイスラームといってもそれぞれ個人ごとに基準やルールがあり、多層性を持っているのだと理解した。人によって信仰の仕方が異なることでもめ事が起こることはないのかと疑問に思っていたが、宗教は自分と神との対話であるのでそこに他人は介入しないと分かり、個人主義的な宗教思想が認識できた。今回トルコ研修に参加するにあたり、積極的に現地の人に話しかけようと自分の中で決めていた。自分の語学力に自信がなくても、積極的に相手に興味を持つことが大切だと学ぶことができた。自分とは異なる文化背景を持つ人と話すことで、グローバルな視点や柔軟な考え方を学ぶことができた。（法文・3年）

・トルコから中東地域の様々な面が体験でき、中東地域の歴史・文化を学んだことは、今後の学習と研究に極めて良いテーマになると思う。また、東アジアに生活している私たちは中東地域に対して負のイメージを持っている。もちろん、戦争・内乱・テロ・難民などのキーワードは確かに中東地域に繋がっているが、今回トルコで見た真実及び良いイメージを加え、全面的な中東・イスラーム事情を周りの人々に伝えたいと思う。（法文・2年）

・グローバルな視点に立って宗教や文化を語るということは、世の中で起こる多くの現象を無理に抽象化・単純化することはせずに多様な価値観を認めることであるということだ。私は、今回のトルコ研修によって、異文化を理解するということがある特定の考えの存在だけでなく、多様な価値観の存在を受け入れることだと解釈した。これから先に外国の文化を調べる際には、書籍、ネット、他の人の体験だけで済ませるのではなく、多数派の慣習とともに少数派の状況についても注意深い考察を行うようにしたい。（法文・1年）

・日本にいてそこから考える外国の問題と、実際現地に行って現地の人たちから話を聞き、その国の問題について考えるというのは別物であると感じ、何よりも視野の狭さや価値観の違いが非常に実感できた。実際にアンカラ大学の学生と交流する機会があり、トルコの人々の生活・考え方について深く話し合い、日本と比較しその違いを知ることができた。またシリアの難民の方に直接話を伺う機会をいただき、難民について深く考えさせられた。何かしらの理由で母国にすることができなくなった人たちがトルコに移住していることを事前学習の際に知っていたが、実際の現状があまりにも酷いものであるということを実感しなかった。（法文・2年）

・アンカラ大学の日本語学科の学生と一緒に博物館やカフェに行ったり大学で交流会を行ったりした。話を伺うと日本の古い文化やポップカルチャーなど日本に興味をもった理由は人それぞれだが、日本を好きになって日本について勉強されているという事実が非常にうれしかった。学生の皆さんとアタテュルク廟に行った時は展示品を見ながらたくさんの説明をしていただき、その熱量に圧倒された。トルコの人柄や文化に触れることで様々な価値観を知り、視野を広げることができたように感じる。（法文・1年）

・トルコの人々は触れ合ったり話したりすると、私たちのことを快く迎え入れ、たくさん話をしてくださった。また、シリア難民の方はお話の中で、日本ではもうシリアのことは終わったことになっているように感じるとおっしゃっていた。日本のニュースなどのメディアだけから得た知識で判断するのではなく、実際に触れて、見て、自分が感じる事が大事であると改めて感じる事ができた。今回の研修に参加して日本ではできないような様々な体験をして、研修参加前と考え方や価値観、海外に対する見方が変わった。このことを思い出で終わらせずに、得たものからさらに自分がステップアップできるものは何なのかを考え、行動に移していきたいと考える。（法文・2年）

・アンカラ大学の学生と交流する機会があり、お互いの文化や生活の習慣などについて話をすることができた。学生は日本について知りたいという思いが強く、流暢な日本語で日本のことについてたくさんの質問をしてくださった。学生の他国について知りたいという探求心の強さを知り、私たちも他国に対する探求心を強く持つ必要があると思うようになった。また、日本だけではなく他国にも目を向けられるようなグローバルな視点を持つためには他国についての知識を身に付けるべきだと考える。今回の交流でそのことに気づくことができた。（法文・1年）

・今回の研修時期が日本で新型コロナウイルス感染者が出た頃であったことから、トルコではコロナを理由に冷やかされることが度々あった。また、珍しいものを見る目で見られたりすることもあった。これらは差別というよりはコミュニケーションをとりたいという気持ちから来るものであったように思われる。しかし初めての経験で敏感になっていた私にとって、これらは大変不安に感じるものであった。この体験から差別について改めて考えさせられた。私が日頃差別とは思わずに行っていることが相手には差別に移っているのではないかと思ったからだ。例えば私が街で見かける外国人に羨望の眼差しで見ている時、相手はどのように感じていたのだろうか。このことについては、今もSNSを通じて連絡を取っているアンカラ大学の方々とも話し合っていきたい。
(法文・1年)

・この研修を通して多くのことを学び、考えたが、その中でも印象に残ったことは三点ある。第一に、宗教のあり方や信仰の仕方は様々であるということだ。トルコは主にイスラームを信仰している人が多いが、その信仰の仕方は様々だった。第二に、トルコという国は様々な歴史や国が積み重なってできた国であるということだ。トルコは歴史の中で様々な国や民族が入り、その歴史が積み重なっている国だと感じた。第三に、シリア難民の方からお話を伺うことができ、シリア難民の方々の現状や求めているものを知ることができたことだ。トルコはシリア難民を多く受け入れており、難民のための政策も行っている。話の中では、その方が今のトルコ政府の政策についてどう思っているのかについて政府に求めているものを伺うことができた。この話を通して、日本でできることや自分に何ができるのかについて考えることができた。
(法文・1年)

・本研修を通じて、様々な人々と交流し、対話の内容や様子を注意深く見て、各々の文化背景等を感じることでグローバルな視点や能力を得ることが出来た。日本の「外国」について考えるとなると、途端に国という大きな単位で個人すらも測りがちであったことに気づかされた。同じトルコ内部でも地域や人々でその背景は異なり、単純に一つの国の人として見るができないと気づかされた大きな要因として、宗教観・人々の接し方がある。トルコ政府が進めてきた宗教との向き合い方の指針が地域で顕著な違いを生み、それぞれに住む人々の考えに影響を与えていったのではないかと考えるが、その影響が多大なものであった分、異なる地域をまとめてトルコとして、その宗教観を語るのは難しく、イスラームという括りの中だけでもそれに様々な形があるのだと加味すれば、それは更に困難である。現地を訪れる前にはそのようなことについては考えもしていなかったため、このような光景とそれに関する人々の話を聞いたことは自身の視点を広いものにする要因となった。一つの国でも地域や人によって文化や特性は異なり、それぞれの背景も容易に一括りにできるものではないという、自分が育った国に対してであれば至極当然である考えについて、実際に現地を訪ねることによって日本の外でも同様であることを自ら実感し、そのような観点から得られる多角的な視点を得ることができた。
(法文・2年)

(次ページに研修写真を掲載)

